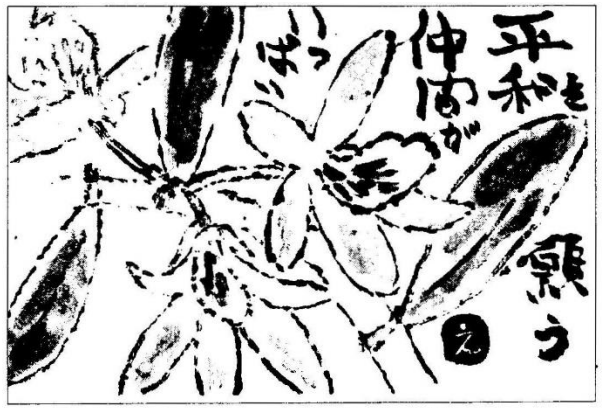
「戦争を忘れないで語りつごう」

第5回 こまえ平和フェスタ２００９

戦争体験談集

―― ２００９年５月募集より ――



（こまえ平和フェスタ２００９募集絵手紙より）

［主催］　こまえ平和フェスタ実行委員会
狛 江 市

（原稿の中で現在では使用されていない地名等がありますが原文のままで集録しています）

シベリア抑留記

宮崎　清　（中和泉在住）

ソ満国境　綏芬河　　入隊昭和二〇年五月
牡丹江省横道河子　　終戦　当時二〇歳

戦闘部隊であった。終戦を知らず撤退々々、横道河子の山中にて敗戦を知る。武装解除命令が届いたのは、終戦三～四日後だった。その地から牡丹江市に集合、各隊五〇〇名単位で部隊が編成され、私達は九月半ばにはシベリアに徒歩で入る。

どこに連れて行かれるか勿論わからず、ソ連兵のマンドリン銃におどかされながら、ダワイ（速く）々々（速く）という言葉に追い立てられながら歩かされた。ソ連兵は我々の持ち物、特に時計などは片端から取っていった。

途中、道端の脇には、女、子供達の死体があちらこちらに横たわっていた。たぶん、開拓団の人々ではないでしょうか。雨水に打たれ、水ぶくれに日が当たり、見るに堪えられないほど、痛々しい変わった姿になっていた。

いったいどの位歩いたのかわからず、おそらく二〇キロ～三〇キロくらい歩いたのか…顔を上げて前を見ると鉄道の線路が見えてきた。少し先の方に盛り土があり、プラットホームのような所であった。数時間その場所で待機していたそのうちに貨車がきた。五両ぐらい連結していたその貨車の大きさに驚いた。日本の二～三倍はあるので、五〇名～六〇名くらい入ってすぐに走り出した。皆、ダモイ（帰国）と思ったが、列車は南に行かず北に向かって走っている。途中で止まったり、二〇〇名、三〇〇名単位で降ろされているようであった。

我々も途中で降ろされた。ここがどこであるのか勿論わからず、季節は九月半ば、我々は戦闘部隊夏服のままで、シベリアの寒さが身にしみてきた。追い打ちをかけるように、栄養失調、シラミが媒介する伝染病チフス、赤痢などにかかって、それがみんなに蔓延して、仲間がバタバタと死んでいった。私はおかげで年代も一番若い方（二〇歳）だったので、最初の冬は伐採、弾丸道路（ウラジオストク～ハバロフスク）八六〇キロの道路造り。今までそのような仕事をやったことのない人がほとんどなので、遅い春、五月頃を迎えた頃には、三〇〇名いた戦友がわずか二〇名前後の生き残りなのです。

捕虜の一日の食糧「黒パン三五〇グラム、雑穀四五〇グラム、野菜八〇〇グラム、魚一〇〇グラム、肉二五グラム、油一〇グラム、塩二五グラム、砂糖一八グラム、茶〇・五グラム、タバコ一八グラム」、世界の捕虜規定表ですが、実態はまったくでたらめ。いろいろ中間でふところに…ロシア人のピンハネ。塩が一番大事なことを学びました。中国人が塩を大事にしていたことを思い出す。

今まで一緒に作業をしてきた戦友を葬ることは真冬はほとんどできません。雪の中に埋めるだけです。春先になると無数のカラス（他の動物も）きて死体をついばむ。そのカラス（動物）を捕って食糧の足しにしたりした。いかに残酷か…それが戦争の犠牲なのです。

伐採、弾丸道路造り丸三年　過酷な環境と重労働の日々。酷寒凍土の地で伐採。零下三〇度前後になる真冬が伐採に最適なのです。森林の木が一番きりやすいのです。幹ま

で凍っているので日本の氷屋さんが氷を切るような調子でノルマが一番消化できるのです。それと反対に、春夏は幹に水分ができて切れてもノルマは冬の三分の一ぐらいしか切れないのです。

よく兵舎では日本の四季、食べ物の話など春夏秋冬それぞれのたべものの話、地方によっては同じものでも言い方、呼び方が…みなさん一番に食べ物の話に興味があった。丸三年を迎えた。身体の方は、スポーツで鍛えた体力と精神力、そして、なにかが、見えないが内地の家族達が後押ししてくれるような気がして仕方がなかった。最後にはソ連兵とも仲良くなり帰国の話など近況も教えてくれるようになった。

戦争犠牲者は銃後にも

漆戸　敏　（岩戸南在住）

戦争体験といっても私たちの年令は戦争の端境期にある。しかし、傘寿を迎える年代は、第一戦で戦うというよりは日本国内で戦争に参加していたということができる。私は当時長野県諏訪市に住んでいた。

一九四二～三年頃には、東京からどんどん疎開者がやってきた時代である。彼等とくに疎開児童も戦争の犠牲者ではなかったろうか。彼等も戦争がなくて東京に住んでいれば親や兄弟姉妹や友人たちと共に東京の学校で勉学や遊びもできたのである。しかし、戦争のお陰で親や兄弟姉妹や友人と離れ、知らぬ田舎にきて暮らさないといけなかったのだ。傍目にも可哀想であり戦争の犠牲者であったと感じた。

そういう私の年令でも戦争に参加して勉強どころではなかったのである。幸いながら私は体格検査で落ちたが、同年の小学六年生の学友は「少年戦車兵」や「少年航空兵」に応募、パスして戦争に参加していたのである。私は間接的に参加したといってもよい。どういうことかというと、学徒動員で諏訪市にあった潜水艦のバルヴを作っていた軍需工場で働かされ、本来の勉強などは全然できなかったのである。

昭和二〇年八月頃には大東亜戦争は玉砕が相次ぎ負け戦であったが「そのうちに神風が吹いて日本はきっと勝つ」。先生や大人たちに言われたもので、私たちはそのコトバを信じた。そして広島、長崎に原爆が落とされ敗戦の日を迎えた。この「敗戦」も「終戦」とコトバを変えるようになった昨今である。しかし「え？アメリカと戦争したことあるの？」と言う若者たちを見ると嘆かわしいかぎりである。戦争体験者がだんだんと死んで日本からいなくなり戦争そのものが風化していく現在である。戦中ふつうの勉強もできなかった私たちもまた戦争の犠牲者でもある。

最後の陸軍少年飛行兵

竹内昭吾　（和泉本町在住）

終戦で生き残ったのです。北海道第二師範学校予科から青函船舶鉄道管理局奉仕徴用。志願しない者国賊ぞ！の教条主義の時代です。志願しました。陸軍少年飛行兵学校、海軍飛行予科練習生（乙）、両方落ちたのです。これで「残念でしたねえ、また頑張って」で近所は通るのです。それが敗戦近くの昭和一九年年一二月一〇日陸軍少年飛行兵合格。人が足りなくなったのでしょう。

昭和二〇年一月一〇日午前八時三〇分まで。当地高射砲聯隊に召集令。

ここで当時の学区制を言います。現在の6・3・3制になったのは、昭和二三年、GHQの命令でできたもの。尋常高等小学校、六年、県立（道立）は普、商、工、各一、女子は高等科無く、私立女学校五校あり県立は普一のみ。二〇万都市（現三〇万）です。（昭和一六年より国民学校、終戦まで改称。）　男子は他に高等科卒より師範学校予科を受験すること可。学費無料。義務、予科二年卒後、指定小学校代用教員として二年勤務後、本科に戻る。オルガン（ピアノは有名校少数）ドレミで音符なしのらんぼうなものでしたが、なんとか！　それ以上求めるなら現筑波、お茶の水のような高等師範学校可なれど、小生頭脳不可。当時、兄弟五名、九名ざらでしたので、小学クラス五七名（詰め込み）。殆ど進学できないので差別感皆無。

少年兵の話になります。軍用列車、夜間ばかり、横浜下車組、海軍特別年少兵（海兵団）。これは硫黄島また途中敵潜水艦で全滅、昭和四、五年生まれ。可哀想です。茅ヶ崎で海軍予科練（乙）殆んど全員に近い感あり。下車。乗る機をベテラン本土決戦用に残したので伏竜兵（海中五〇メートル間隔から地雷棒を突き出し、敵上陸用舟艇を爆破自死するもの）。これは練習中の事故死多く、実施に至らず。私共少数は三重明野空よりダグラス輸送機（アメリカ製）で、福岡久留米近し、太刀洗陸軍少年飛行兵学校。学校とはいえ、ベニヤと木で、午前座学、午後グライダー、壕堀り、ニセ飛行機作りなど。

四月、沖縄全滅近く、特攻盛んなり。私は操縦は勿論。偵察、通信（トンツー）等不可。旋回銃と三八式歩兵中、ピストル、手旗信号くらい可。それでも連れて行かれました。沖縄までは行っていません。一人乗りの戦闘機はベテランの方。私は七人乗り、重爆撃機「飛竜」。そばの鹿屋は海軍で同型機で「靖国」と呼称。

コピー（写真）はトラックから降り乗機に向かうところ、お前の方が良く撮れてる、ケンサク？とか文明器具でアドレスを知り送って頂いたもののコピーです。太刀洗から一旦南端の知覧陸軍飛行場着陸後特攻命待機（知覧は滑走路を長くしたので。）

このコピーはおそらく三回目で、熊本上空で知覧空襲中なり、逃げろ！のトンツー。

太刀洗でなく島根方面まで逃げたときのものと思います。
隊長は本ちゃん（士官学校出バリバリ）でなく、九州帝大か京大かの文学部、知覧促成士官で、いい方でした。生死は隊長次第ですね。若（じゃく）（少年兵）は死ぬことない。いくさはもう終わると言って、雲の上ばっかり飛んで、敵発見せず、帰油ギリギリ、トンツー。また潤滑油風防にかかり視界不良、戻るトンツーでしたよ。整備士官と打ち合わせているみたい？新しい単機などボルト締め弱く（当時中学生、女学生工場奉仕多く）締めなおしたものです。
きりがありませんので、このくらいに。お目通しありがとうございました。

記憶の中の八月六日

松本　鞆子　（中和泉在住）

一九四五年八月六日・広島の空は青く澄んで、太陽はギラギラと照りつけ特別に暑い朝を迎えた。
午前八時十五分、B29「エノラ・ゲイ」から「リトルボーイ」と名付けられた「原子爆弾」が広島市の中央地上五百七十メートル地点で投下され炸裂した。爆心には巨大な火球ができ、真っ黄色の閃光を放ち地上を降りるに従い直径も二～三千メートルに広がり衝撃波を伴い三～四千度の高熱で一瞬のうちに広島を破壊した。あの大きな「きのこ雲」の下で広島にいた約三十七万人の人々は恐怖の「地獄」を体験したのであった。
当時の私は広島女高師付属山中高女の四年生（十五歳）学徒動員で第二総軍暗号班の基礎訓練を受ける為牛田の我が家から青空の中に光るB29を見上げながら千田町の学校へ向かった。
朝礼を終え体操服に着替えて、カーキ色の制服を下駄箱に「置いてはいけない事を」知りつつも、その日に限って無性に水を飲みたかった。隣にいた旧友の西村信子さんが「うちが持っていって上げるけん、貸しんさいや」と言われたことを良い事に制服を預けて、一目散に水飲み場へ駆け込み「ああ、美味しい」と口に手をやった途端、突然運命の真っ黄色の「閃光」が目を覆った。
後頭部から左腕にかけて熱いものが通過した。前にいた宮川さんのおさげ髪に火がついた。私の衣服も燃え出した「大変だ！　火を消さなくては」と貯水池へ走ろうとしたら、物凄い力で体が宙に舞い上がり地面に叩き付けられたと同時に二階建ての木造校舎が、ガラガヲと崩れて体を押さえつけ真っ暗闇に閉じ込められてしまった。例えようのない恐怖を感じ乍ら気が遠くなっていった。

どの位経ったのだろうか、闇の中に一条の鈍い光が差し込んでいた。「生きられる」と思ったら元気が出た。「お母さん助けて」と大声で叫んでみた。外の方でもあちこちで先生やお母さんの助けを呼ぶ声がする。光を頼りにもがいてみたが崩れた校舎に挟まれて身動き出来ない。先刻まで助けを呼ぶ大声も段々小さくなり黙ってしまい辺りは静かになってしまった。このまま死んでしまうのかと「絶望」が頭の中を過ぎる。

ふと、日頃母と話しあっていた事を思い出す「死ぬ時は一緒よ、必ず帰ってくるのよ」の言葉を。

「死んで、たまるか」と奮起した。我武者羅に手足を動かしているうちに、右手がスポッと動く。手当たり次第に押したり引いたりを無我夢中で繰り返えす。左手がヒリヒリ痛い、背中は何かで刺されたような痛みがあったが、母との約束を果たさなければの思いは強かった。

とうとう校舎の下から這い出る事ができた。しかしそこで見たものは正に「生き地獄」そのもの、見る影もなく崩れた校舎の山、右往左往する人々は皆同じように土埃りと血のりで固まったザンバラ髪、破れた衣服はワカメの様に垂れ下がり痛みのためか誰もが両手を前に差し出すようにしてゆっくり歩いていたり、気が狂ったように泣きながら喚きながら走り回る人、血の海の中に座り込んでいる人の足首からは白い骨が見えていた。

西の方の空は黒い雲に覆われていて、太陽は奇妙なオレンジ色に見えてこの世の終わりかと気味悪く思った。

西村さんの事が気になり教室の方へ行ってみる。倒壊した校舎へ一歩踏み入れると下敷きになっている人の「痛いよう、苦しいよう、助けて」の悲鳴がする。藤棚の丸太を引っ張ってきて梃子にするが私の力ではビクともしない。

二階の梁の方でカーキ色の制服が助けを求めるように、風にはためいている「西村さーん」と叫んでみたが、返事は返ってこなかった。

「『松本さん、助けて』と言いながら、あんたの上着を抱いて西村さんは死によったんよ」と、教室に十人いた中で只一人の生き残りの大村さんにその時の様子を最近になり聞く事が出来た。

国の一大事という時「欲しがりません勝つまでは」と、すべての事に耐えてそれでも精一杯の明るさで動員先では懸命に働いてきた少女たち、爆心地点より千七百メートルの所で生きながら突如押し寄せてきた「原爆の放射能を含んだ衝撃波」に尊い命を焼き尽くされて逝った。

この悲惨過ぎる出来事を決して忘れてはならない。

平和な時代に命を頂いている者として、次の世代を担う子供たちへ亡くなった友の代りに世界中が平和で有りますように　「核兵器の恐ろしさ、人の命の尊さ」を勇気を出して、語り伝えなければと思う。

合掌

海軍少年電信兵を志願して

―一瞬の空中戦―

市川康之助　（岩戸北在住）

太平洋の風雲急を告げた一九四一（昭和十六）年、齢若くして、海軍少年電信兵を志し、同年五月一日、郷人の歓呼の声に送られ、横須賀海兵団に入団、二カ月間にわたる基礎教育を受けた。七月一日憧れの久里浜の海軍通信学校に入校した。「指頭有声」と真剣錬技を胸奥に秘め、日夜、通信技術の練磨に励んだ。在校中に太平洋戦争が勃発。卒業が繰り上げられた。一九四二（昭和十七）年三月、桜の開花を待たず、教官はじめ教員、在校生の打振る帽に見送られ、熾烈を極めた砲煙弾雨の戦場へと母校を巣立っていった。

卒業後、東京通信隊船橋分遣隊（送信所）勤務。同年五月、第四艦隊司令部（トラック島）に配属。しかし間もなく、井上成美中将麾下の通称公家部隊（四十一警備隊）所属の監視艇に乗船となり、内南洋に一歩も敵を入れないように、対潜対空の哨戒通信にあたった。

しかし、この鉄壁の守りも、ニューギニア戦線がガダルカナル島の撤退など彼我の力関係に変化を生ずるに及んで、勤務も危険窮まりなきものとなった。その後トラック島を基地とする、第九〇二航空隊に搭乗配置となったが、搭乗する飛行機は零式低翼単葉三座水上偵察機（下駄履機）で、敵の新鋭の乱舞する内南洋の空を敵に発見されないように哨戒の任にあたることは、その日その日が決死行であった。

その後エンダービー島転属。大陸より南下する船舶の航路となるため、日夜灯台にて原住民二名での見張りをし、また偵察機で航路周辺の偵察索敵の任務にあたり、緊急時また定時に本部電信室との交信。そして、すでにサイパン島もテニアン、グアム島も又ペリリュー島も玉砕した後、一九四四（十九）年六月、敵大部隊の集結するウルシー泊地偵察の途次、眼下に展開する敵艦艇部隊を発見、一瞬頭上に護衛する敵数機と交戦。孤軍奮闘するも及ばず、射手は即死。操縦士は負傷を負い、機は、ヤップ島とパラオ島の中間の海面に墜落したと後でわかる。「ハッ」と気がついた時は、言葉のわからぬ白色人種に取り囲まれ、後日、白衣の兵士がいるので病院であることがわかった。

一九四五（昭和二十）年十二月、ヤップ島米軍捕虜収容所から焦土と化した日本に復員、今日に至る。

（調布市教育委員会発行「いまも心に―戦争体験を次の世代に―」から）